

# 実践記録

90

シリーズ

第56回新潟県公民館大会  
事例発表1

妙高市公民館妙高地区館 館長 後藤 眞作

## 中1ギャップの解消と通学キャンプの実践をとおして

◇はじめに一妙高市公民館の組織(省略)

◇妙高フレンドスクール通学キャンプ

…仲間と一緒に…

・開催のきっかけ

旧妙高村は、小学校が3校(関山小学校、原通小学校、大鹿小学校)があり、中学校が1校で、小学校から中学校に進む中学校1年生の学校生活への不適応(中1ギャップ)の解消のためや、子どもたちに「人と関わる力」を伸ばして欲しいという願いから企画された事業です。今年も妙高市で実施の予定です、5年目になります。

妙高フレンドスクール通学キャンプでは、7泊8日という長期にわたって友達と共に生活し、話し合い、活動することによって本音をぶつけ合いながら、人と関わる喜びを感じて欲しいと思います。それと同時に、長期間家族と離れて暮らすことから、自分と家族とのことを考える機会にして欲しいと願っています。普段生活の中ではできないことを体験することで、子どもたちに「生きる力」や自信をもたせることが必要であると考えられています。

◇趣旨・背景

※3小学校が1中学校へ進学するという旧妙高村の実状を踏まえ、3校の学校間交流を促進し、中学校生活へ向けての人間関係の基盤を作る。

※共同生活を行ったり、話し合い活動の時間を十分にとったりすることで、現代的課題の一つであるコミュニケーション能力の育成を図る。

※キャンプ期間中、自分のことはできるだけ自分自身で行うようにし、生活体験の場を多く設定し、自主性や生活能力の育成を図る。

※家庭での子どもに対する過保護、過干渉が憂慮されている現状から、親子それぞれの自立を促すとともに、家庭や家族の大切さを見つめ直す機会を提供する。

この事業は、8日間という長期間ゆえになしえた子どもたちの成長が事業成果としてあげられます。自ら考え、仲間と共に企画し、自分達で準備し、自分達の責任において活動を実施しました。

昨今、「中1ギャップ」という言葉が使われるほど、小学校から中学校への進む段階で、不登校になる子どもの割合やいじめ件数が急増する傾向にあります。社会環境や生活様式の変化に伴い、学校生活の変化や新たな人間関係の構築への不安を抱えていることが原因として考えられます。中学への進学を目前に控えた子どもたちから、このような抵抗感や不安を少しでも取り除くと共に、新しい人間関係を築いていくために必要なコミュニケーション能力を育成することが求められています。

これらの背景を受け、地域の中核的教育施設として国立妙高少年自然の家を会場に、地元小学6年生を対象とした学社連携事業として各小学校、保護者、上越教育大学の協力を得て通学キャンプを実施しました。

◇活動計画・プログラム(省略)

◇活動内容

小学6年生46名全員を対象として本事業を実施した。(11月7日(日)～14日(日)までの7泊8日、国立妙高少年自然の家、

欠席者がなく全員参加)。

子どもたちは、長期間にわたって家族から離れ、朝は少年自然の家から学校に通い、夜は仲間と一緒に共同生活を送るという初めての体験をしました。そして、共通の生活体験や話し合いなどの様々な活動をとおして、コミュニケーションや他人との関わり方、協働について考え、実践する貴重な機会となりました。各学校の校長・学級担任、児童・保護者の代表、教育委員会、活動補助員(大学生)及び少年自然の家職員による実行委員会を組織し、連携しながら事業を展開しました。

事前指導として、実行委員会を通じて各学校で話し合い、学校間で情報交換しながら児童一人一人の特性を配慮して、グループ分けをしました。

また、子どもたちの活動をサポートしてくれる活動補助員(大学生)の研修会も2回実施しました。(事業への共通理解、実際の活動プログラムの体験や活動のねらいを意識した児童との接し方、主体的に、子どもたちとの関わり方や話し合い活動のさせ方や、活動のまとめの手法などについてワークショップ研修)

◇人間関係の深まり、広がり

～グループづくり

初日は、受付、開校式、活動補助員との「出会いの活動」も含め、「知りあう」ことをねらった活動を設定しました。夕食は、与えられた食材を見てグループで何を作るか相談して調理する課題解決型調理実習「びっくりディナー」で作りました。「ロールキャベツ」「カレーラーメン」など普段あまりないメニューでアイデアに富んだ料理が出来上がり、バイキング方式で会食しました。グループの内外で豊かなコミュニケーションが生まれ、新しい人間関係が広がったようでした。



慣れない手つきでの調理に挑戦

◇生活自立～家族への手紙

家庭・学校と連携して、親子間の手紙のやり取りを実施しました。あらかじめ学校を通じて、家族から子ども宛てに生まれた頃の話や、子どもを大切に思う気持ちなどを手紙に書いてもらいました。キャンドルの灯かりの中で一人になり、家族からの手紙を読み、普段の生活を思い出し、家族や自分を見つめ直しました。

そして、家族に対する気持ちをシラカバのハガキに素直に表現し、家族に向けて投函しました。家族と離れて生活し家族の大切さに気づき、自立心の涵養がみられる場面でした。



シラカバによる手紙づくり

◇協働～自分たちの活動づくり

「仲間といっしょにチャレンジデー」では、グループの活動テーマを決め、そのテーマ

の実現に向けて、自然の家でしかできない活動に挑戦しました。前日まで夜の活動時間を使って話し合いを繰り返して、子ども自身が主体的に企画・準備を行いました。また、話し合いに参加する姿勢やグループへの関わり方について、子ども自身がふりかえる時間を毎日設定しました。このふりかえりとおして自己の目標を確認、設定し直ししながら話し合ったり、活動したりしながら豊かな集団活動に取り組みすることで、よりよい方向に変容する様子が見られました。



完成した足湯でニコリ

当日は、宿泊可能な「森の小屋づくり」、ブランコなどの道具を使った「森のアスレチックづくり」、本物の温泉を使った「足湯温泉づくり」などダイナミックな活動を仲間と協働してやり遂げ、大きな感動や達成感を得ることができました。

これらの活動プログラムのほかにキャンプ期間中は、各種の活動場面での話し合い活動や集団宿泊体験活動をとおして、人間関係を広めるような一貫性のあるプログラムを構成しました。

◇振り返って

妙高フレンドスクール通学キャンプを実施してみよう

◎学校、家庭、保護者の理解と対応が必要

◎関係者への説明

最初はやはり、学校、家庭、保護者の抵抗もありました。ですが、学校への説明、保護者の説明会、施設見学、実行委員会の開催などにより理解を得られたと思います。説明会では、いろいろな意見、意見より質問が多かったように思います。夜の世話はどうするのか、パジャマはどうするのか、こづかい、洗濯は…

実施してのアンケートでは、保護者は開催して良かったが90%、児童生徒の意識は、「みんなの意見をまとめる」「困っている人の意見を聞いたり、助けたりしようとする」「遊んでいる仲間にあとから加わる」「新しい友達を気軽にしてくれる」「相手の気持ちを考えて話し合ったりつきあえる」「あいさつやお礼が言える」「大勢の人の前で話すことができる」「誰とでも気軽に話すことができる」以上の項目により、事前、事後、1ヵ月後の調査で、全ての項目において向上がみられました。本事業のねらいであった「人間関係の深まりや広がり」「活発なコミュニケーション」の伸び率が特に目に付きました。朝起きてから夜寝るまで友達との豊富な会話があり、チャレンジデーに代表されるように、常に挑戦する機会を経験したことと思います。保護者からは、家族と離れて生活することで家庭生活を別の面から考えることができ、親子共々自立するよい機会になりました。また、子どもが持つ体験を基にした実践力や可能性に多くの保護者が気付いたのではないのでしょうか。中1のギャップがなくなり、リーダーとして信頼されて活動している姿、集団での様々な活動をとおして人間関係の幅が広がったと思います。